The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	植民地時代の台湾知識人研究 ： 「民族意識」の変容をめぐって
Author(s)	張, 修慎
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43283
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	張（ちょう）　修（しゅう）　慎（しん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　17157　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**植民地時代の台湾知識人研究－「民族意識」の変容をめぐって－**
論文審査委員	（主査） 教　授　木村　健治 （副査） 教　授　中　　直一　　助教授　木村　茂雄

論文内容の要旨

本論は、台湾が日本の植民地となった1895年から1945年にかけての台湾における当時の新聞や雑誌さらに文学作品などを通じて、知識人の民族意識がどのような変化を遂げたかを明らかにすることを目的とする。前半では、1920年代社会運動が盛んであった時期に、激しい社会変革の中で知識人がどのような役割を果たしたかを新聞や雑誌を通して検討することが中心の課題となる。後半では、日本の弾圧下にあって、政治的活動を極端に制限された、1930年代以後の文学作品を対象とする。

台湾は1895年の日清戦争の結果、清国から日本に割譲されて以来、第二次世界大戦が終結する1945年までの50年間日本の植民地であった。しかし、台湾人はこの事実を承認しようとせず、1895年の「台湾民主国」から1915年の西来庵事件[1]まで台湾全島で武力抵抗は強弱はあるものの常に続けられた。それらの抵抗に対して日本統治側の厳重警戒と弾圧が加えられたが、弾圧とこれに対する抵抗をくり返しながら抵抗運動が弱まるとともに、日本の植民統治が確立されるに至った。

一般に、西来庵事件は一つの転換期と考えられ、ほぼ1918年頃から台湾の社会にも変革運動が散見された。その頃、台湾から日本に留学する青年達が増え、宗主国である日本で学んだ知識が台湾にもたらされ、従来の台湾社会に大きな影響を与えた。台湾の近代化は、海外の留学生達によってもたらされたものである。さらに、第一次世界大戦末期の世界思潮の影響で、台湾人知識階級の抵抗運動は近代的な政治結社による合法運動へと変化した。日本の植民地統治政策も1920年代に入ってから、武官総督から文官総督による統治に移行し、台湾社会や台湾知識人の意識にも大きな変化をもたらした。

そのような歴史的背景の中で、1920年代初期、初めて登場するのは台湾知識人が主導したいわゆる「新・旧文学論争」である。当時、新しい教育を受けたインテリ青年達が文学を通して積極的に「台湾改造」を目標とし、旧知識人の手から指導権を奪おうとしていた。日本の弾圧下にあって、政治的活動を極端に制限された台湾知識人達は「文学」という手段をつかって「台湾改造」にのり出したのである。

1920年代前半までの「新・旧文学論争」は言語使用についてのみで、文学理論についてはほとんど論じていなかった。だが台湾知識人の間には、その根底において大きなずれが存在していたように思われる。それは、「台湾改造」や「社会改造」を意図する知識人達が、共通して中国伝統文化を尊重するのか、それとも西洋文明を根拠として活動しようとするのか、という論点であった。もちろん、それは単なる単純な文学論争ではなく、ある種の新・旧文化の

対立と考えても良いだろう。

前述のように1920年代は、西洋的思潮の影響力が増大の一途をたどった時代であり、また政治や社会の激動が続いた時代でもあった。日本史からみれば、1920年代から1930年代にかけて、社会主義思想がかなり強くなった時代でもある。その原因としては、1917年のロシア革命により、社会主義政権が樹立され、長い間にわたり無視され抑圧されてきたプロレタリアートが台頭し、社会主義思潮とりわけマルクス・レーニン主義が地理空間や人種の境界を越えて、巨大な思想的潮流と成ったことが考えられる。台湾は日本帝国により植民地とされたために、当然このような思想変化の中に巻き込まれていく。その意味では、台湾知識人研究は、台湾近代思想史の重要な一部分であるだけでなく、日本近代史研究とも深く関与している。

1920年代の台湾は、日本の経済統治によって台湾社会自らが変化する一方で、知識人の社会主義に対する関心も一層高くなった。しかし、1930年代後期から、日本社会にも大きい変化が動き始めた。1937年、盧溝橋事変の勃発によって、それまでの政治運動は存続できず、知識人の意識にも大きな変動が見えるようになった。かかる世界政治や思想変化の激動の中で、台湾では本格的な「皇民化運動」が実施された。台湾人の名前を日本人風に改める「改姓名運動」が行なわれた。

さらに、1941年に台湾で「皇民奉公会」が設立され、加えて志願兵制度が制定された。このような「皇民化運動」を巡っては「台湾人の意識がこの戦争により中国へ向かい、抗日意識が高まることを恐れ、『国語』 政策を軸とする『皇民化』政策を加速させた」[2]という見方もある。間違いなく台湾人は、日本帝国主義の政策によって、より強制的な意識変化をさせられたと言えるだろう。

総じて、二十世紀における植民地解放運動は、反帝国主義のもと民族独立運動として展開されたと思われる。しかし、台湾における植民地解放運動にはかなり複雑な要素が含まれている。今日まで広く認識されているのは、清国から日本に割譲された台湾における植民地解放運動は、「祖国」である中国への復帰運動の中に位置付けられるということである。しかし、日中戦争と内戦に直面した中国の混乱の中で、「祖国」の中国はどんな視線で台湾をみつめていたのか。そして、植民された台湾人にとって、「祖国」中国とは何であるのか。こうした一連の疑問は台湾近代史に理想と現実という大きい問題を現在まで残している。

台湾の歴史を振り返ってみると、台湾における異民族の統治は日本植民統治だけではなく、清朝のそれも異民族統治であった。さらに、戦後の国民党体制においても、その統治は植民統治とほぼ同質であるとしばしば批判されてきた。その意味では、近代台湾人の民族解放運動は戦前から戦後まで存続していると見ても良いだろう。要するに、現代台湾の帰属問題についても、戦前から戦後の国民党と共産党とによる国共内戦や冷戦の状況の中で、解釈上の大きな問題点が論争の焦点となっている。

50年間の台湾植民地問題には、植民地の統治者・被統治者さらに第三者の立場によって常に違う見解がみられる。あるいは、植民地統治を実際に経験した人とその子孫との間でも、思想的背景、個人的経験、また性格上の相違によって、視点が違ってくるのは当然である。植民統治史の中に、頻繁にみられるのは統治された民族の伝統文化の破壊や政治的従属の強迫や経済的搾取など、政策の実行である。一方、植民統治の過程の中に必然的に現れてくるのは統治された民族の抵抗である。本来、植民地統治には統治当局の弾圧と被植民側の抵抗とが織りなす事態が交錯すると考えられる。こうした考えを基にして、本論では、まさに相互的な視野で50年間の植民地化された台湾知識人の民族意識[3]が変化する過程を、実証的に分析を試みた。

50年間の日本統治は、まさに矢内原忠雄が言ったように、「台湾を日本と支那との二つの火の間に位置づけた」[4]。日本の台湾統治は中国から切り離して日本と結合しようとするものである。つまり、文化的、社会的封建性が強く残っている清国の「内地化」社会から日本の植民地になったことである。要するに、台湾の封建社会が日本の割譲により中国から切り離されたのである。50年の間、台湾人は終始日本と中国の狭間に生きてきた。日本の植民地統治も中国からの隔離政策と統治側への同化政策を同時並行して実施した。そうした支配と従属の関係の中で、台湾植民地知識人研究は同時代の中国の動向とも深く関与していると言えるだろう。従って、台湾植民地の知識人研究は戦前の東アジア史の一部分と相応する重要性を有していると言えよう。

本論文は、一面植民時代台湾知識人の「民族意識」の変容を見据えながら、50年間の植民社会の変化を追究するものでもある。研究対象は、台湾だけではなく、日本も含んでいるが、取り上げる時代は1895年から1945年までの長い

期間にわたった。

尚、本論文の研究対象である台湾では、当時の人口には漢民族だけではなく、先住民が2％弱の人口を占めていたが、膨大な文書と文献資料が未整理のままであるため、本研究では扱うことができなかった。これは今後の課題としたい。

さらに本論文は、主に台湾知識人の民族意識に関する分析であり、宗主国の日本からもたらされた「近代性」の変容に関する分析は必ずしも十分とはいえない。台湾知識人の社会に対する反応、また戦後台湾社会に如何なる影響を及ぼしてきたのかの関連研究を、今後の課題にしたいと考える。

その他、本論文では広範なテーマを総括的に取り扱った関係から、個々の問題を十分に検討することができず、問題の指摘にとどまった点が多々ある。これらの諸問題については、今後の課題として、一層研究を深めていきたいと考える。

[1]1915年南台湾で起こった抗日事件の中で最も規模が大きいと言われる事件である。台湾人の抗日運動を武力闘争から非武力闘争に転換させる契機となり、直接的に社会運動の速度を速めた事件である。

[2]後藤乾一　「台湾と南洋」『帝国統治の構造－講座近代日本と植民地2』　岩波書店1992年　p. 161.

[3]この民族意識というのは「台湾人」としての意識を指す。

[4]『矢内原忠雄全集』　第二巻　岩波書店1963年　p. 376.

論文審査の結果の要旨

本論文は、台湾が日本の植民地となった1895年から1945年にかけての台湾における知識人の民族意識がどのような変容を遂げたかを明らかにすることを目的にしている。

序章で本論文関連の研究史を概観し、第一章「知識人における『祖国』と『日本』」で、日本の植民地になって以来、特に1920年代以後の新しい教育を受けた知識人を取り上げ、本来の文化的祖国の中国と宗主国日本との間で彼らの台湾民族意識がどのように変化したかを解明している。この中では、日本をはじめとする海外の国に留学していた学生たちが台湾にもたらしたものに注目している点が新鮮な着眼点として特に高く評価できる。

第二章「知識人の『抗日』思想」は、1920年代後半、日本の植民統治が思想の面で強い影響を及ぼしたにもかかわらず、台湾の知識人社会には従来の伝統的思想も未だに根強く残っていたことを指摘し、その中で、「抗日」思想が芽生えてきたことを明らかにしている。

第三章「『社会主義』と知識人の関わり」は、1920年代後半から台湾で台頭してきた社会主義がどのように台湾知識人と関わったかを明らかにする。歴史的に見て、台湾共産党の結成（1928年）が、台湾独立思想との関連で重要な点であることを指摘している点は特に注目すべき指摘であると思われる。

第四章「戦時期台湾の知識人」では、台湾における「皇民化運動」と台湾知識人の民族意識を検討している。「皇民文学」に関しては個別の研究はこれまでもあったが、本論文は、全体として歴史の中で知織人が「皇民文学」にどう影響されたかを検討しており、この点もこれまでにない試みであり高く評価できる点である。

本論文は、植民地化と近代化が同時に起こった台湾における知識人の「民族意識」の変容を、新聞、雑誌、文学作品を丹念に読み込み、大きな視点から跡づけたものである。従来の研究のように「抗日」の視点からのみの研究ではなく、総合的に知識人の苦闘を扱い、中国と日本の間で揺れる知識人の心の懊悩に深く目を届かせ、耳を傾けようとしている点が特に高く評価できる。日本語の表現でやや不十分なところも見られるが、それが本論文の価値を損なうものではないことは明らかである。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと判断する。